

211

# 光 学 天 文 連 絡 会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

## 会 報

No. 46

1987-10-15

光学天文連絡会事務局(東京天文台岡山天体物理観測所)



I. 第45回運営委員会報告

日時：1987年6月27日

場所：東京大学理学部天文学教室

出席者：小暮、安藤、田村、兼古、佐々木(ト)、舞原、田中済、小平、西村、岡村、佐藤修二、清水実

1) 活動報告

光天連(小暮)

- ・東京天文台改組調査室資料を配布した。改組構想素案(3月31日付)についての意見を次回調査委(7月4日)に提出する。共同利用、専門委員の役割と任務(予算、人事、研究計画)、総合計画調整委員の構成と任務、技術部等について。
- ・文部省改組調査協力研究者会議への京都大学からの要望書(資料)について。
- ・学術審議会(7月中旬)にJNL Tを盛り込むようにしたい。

東京天文台(小平)

- ・文部省調査協力者会談中間答申案最終検討会に向けての議論があった。改組重点から、天文学発展のための機構変更ということを盛り込んでもらう。
- ・改組概算要求を東大に出した。大型装置と共同利用を目的とする。
- ・技術部は現時点ではメリットが見いだせないが他機関の動向、文部省組織案とのつき合わせが必要。
- ・予算は臨時事業費を確保して、先進的開発をおこなう。JNL T関連では遠宇宙用光学・赤外線観測システムの開発。分担者は所内/客員、他に恒星大気のダイナミクス。共同利用運用経費で実験経費(共同プロジェクト)、旅費がまかなえる。
- ・東大評議会(7/19)では天文台の国立研への改組が了承された。
- ・理学部天文研究施設として3部門+木曾(計20人)を残す。

2) Working Group報告

望遠鏡WG(舞原)

観測機器 Work Shop 個々の提案を持ちより検討する。

体制 WG(安藤)

- ・昨年度答申でついている。WSは新しく開かない。
- ・アトム型、モレキュラ型の研究組織をどうするか。
- ・OAOの充実とその体制、機器開発をどうするか。
- ・天文台調査室では昨年度答申以外のこと(専門委員の任務etc)が議論されているので体制WGで考えたほうがいい。

UC

8月25日UCを開き(1)プログラム編成、(2)共同利用(旅費、実験経費)について話しあう。

国際協力WG(田村)

・光天連紹介の英文パンフは今年度内に作る。

cf) 技術調査経過報告書 全英訳作成

ブラウン氏在日議事録(英文)

2) ハワイ

JNL Tのハワイ側タイムシェアは10%。IFAに日本人研究者をおく。88"をサブ望遠鏡として使えないか。JNL T完成以前に使えるようにしたい。

88"の10%~30日。27\$/night 日本人のSupport Scientistが必要。

Support Scientistは今でも海外学術調査、長期在外研究者(TAO枠)でも可能

・Durham大学との共同研究、政府間交渉にのっている。

Dr. ノイゲバウアーがCaltech-JNL T干渉計を可視、赤外でやりたいと言っている。

3) その他

- ・サイトテスト報告(安藤)
  - ・ハワイで5/25機械訓練テスト後ハワイ島へ。テスト塔未着。LEST建塔手伝い。
- ・風洞実験(京大防災研、理学部)が始まる。
- ・JNLT active supportアクチュエーターは現ロードセルではクリープ現象が起こった。(西村)
- ・望遠鏡仕様案を作っている。ドーム、観測装置は未着手(西村)
- ・事務作業会(安藤)
  - 運用経費(国内本部、ハワイ現地)見積・・・建設費5-10%
  - JNLT推進本部は開発、ハワイ観測事業部は運用にあたる。
- ・鴨方でのシンポジウム時に光天連懇談会を開く。

II. お知らせ

光学天文連絡会シンポジウム  
 -大型光学赤外線望遠鏡とその運用体制-

を下記の要領で開催しますので奮って御参加下さい。

- 日時 : 昭和63年1月26日(火) 9:00-17:00  
 27日(水) 9:00-15:00
- 場所 : 東京大学図書館会議室
- 内容 : (1) 大型光学赤外線望遠鏡計画の進行状況、基調報告、ミラーサポート、サイトテスト等  
 (2) 観測装置開発計画  
 (3) 組織と運用体制
  - ・国立研と光天連の役割
  - ・既存観測所の運用体制(レフリー制、データ処理等)
  - ・国際協力について(ハワイ大学その他)

世話人: 田中 済 東京大学理学部天文学教室 03-812-2111内4262  
 定金晃三 大阪教育大学 06-771-8131内253  
 岡村定矩 東京天文台木曾観測所 0264-52-3360

内容、プログラム等についての御意見を世話人までお寄せください。

III. お願い

光天連会費未納の方が約30名います。  
 会報No. 45と一緒に振替用紙が送ってあります。宜しくお願いします。

IV. 光天連懇談会

昭和62年8月27日、岡山県鴨方町民会館において技術シンポ、岡山ユースミーティング、シュミットシンポが開かれた折りに光天連懇談会が次のように開催された。

日時: 8月27日午後6時-8時  
 プログラム 1. 挨拶 小 暮  
 2. 改組及びJNLT計画の現況 小 平  
 3. 国立研の運営に関する諸問題 小 暮  
 4. 懇談 司会者

司 会 安藤裕康

1. あいさつ

東京天文台の国立研への移行が具体化しつつある現在、共同利用としての国立研の運営体制が当面の大きな課題となっている。光天連としても光学赤外線天文学の立場から積極的に議論を詰め、運営に参加して行くことが望まれる。また、JNLT計画も具体化に向かって進んでいるので、ハワイの運営体制や技術問題について更に検討を深める必要がある。重要な段階にきているので、来年1月に光天連シンポジウムを開催し、全国関連研究者の意向をまとめて行く一つの機会としたい。シンポジウム世話人として田中済(東大理)、岡村定矩(木曾観測所)、定金晃三(大阪教育大)の三氏をお願いした。三氏を中心に準備を進めシンポジウムでは十分議論が深まることを期待したい。

2. 東京天文台の改組及びJNLT計画の現況

1) 国立研への移行の概算要求がまとまり提出されて、全体のJNLT関連のタイムテーブルは次のようになる。



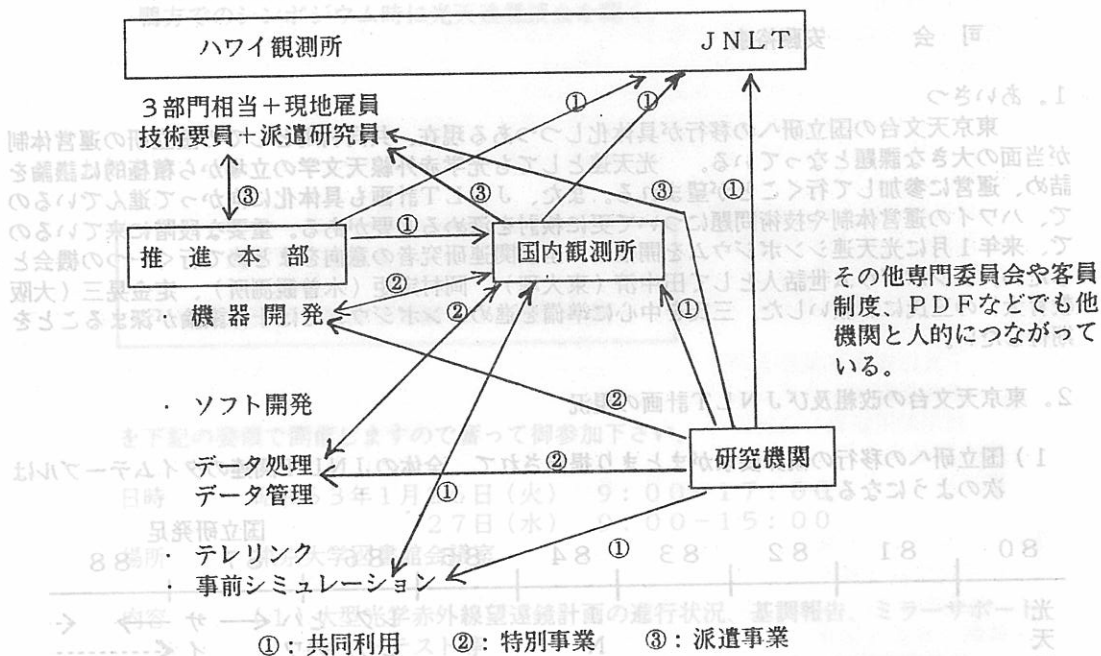
2) 現在天文台から文部省に出ている概算要求では次のような研究系と光学赤外関係の研究部門が含まれていると了解している。

移行時  
 光学赤外(5) 銀河物理+堂平・岡山  
 恒星物理  
 分光測光  
 太陽系天体  
 赤外天文  
 (客員部門)

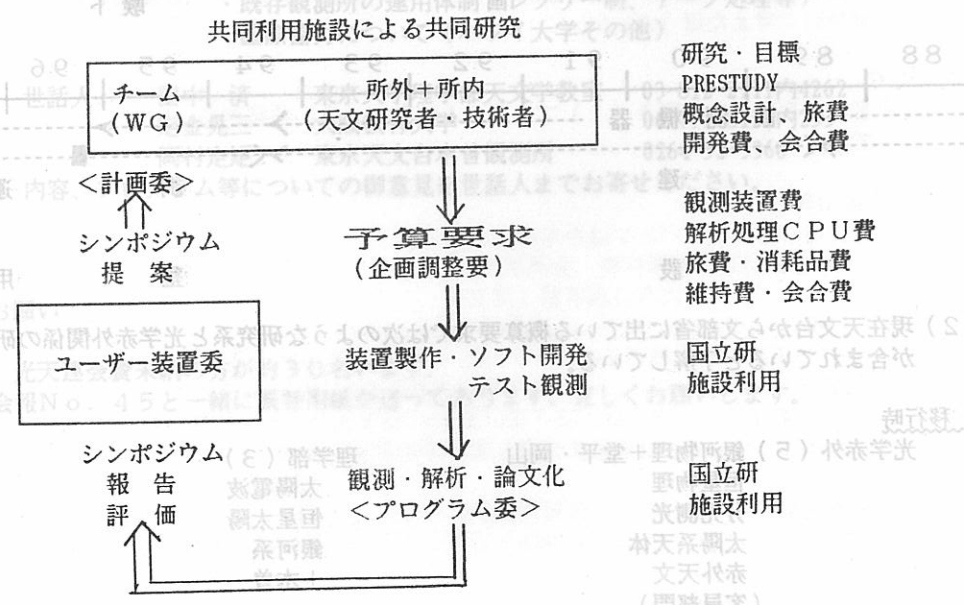
理学部(3)  
 太陽電波  
 恒星太陽  
 銀河系  
 +木曾

3) 太陽(2)+乗鞍、位置・力学(3)、地球回転(5)、理論(2)、電波(5)+NRO+太NRO  
 第一期完成時に向けての要求予定はJNL T関連では技術開発のための推進本部として光学赤外(3)とハワイ観測所(3)計6部門相当をお願いしてある。その他(6)~12+客員。共同利用研として、光天連関係でこれから考えていく予算項目としては臨時事業費、特別事業費、共同利用施設運営費がある。  
 その他については共通予備経費等の運用による。(たとえば国際共同研究等)

3) ハワイ観測所、JNL Tの利用、推進本部、国内観測所、他の研究機関の関係を模式的に示すと、次のようになる。



4) 共同利用、とりわけ機器開発(ハードもソフトも)については今後次の様なシステムで行われるようになることが望ましい。



### 3. 国立研の運営に関する諸問題

国立大学共同利用機関としての国立研の運営には大きな問題が二つある。

(1) 全国研究者の意向をどのように国立研の運営に反映させるか。  
 運営協議員が国立研の重要事項を審議する機関であるが、所外委員を含むため委員会の開催回数も限定され、したがって審議内容も限定的になる。実務的な事項の多くは所内の委員会、例えば所内教授会などで扱うことになる。そこで所内外の運営に関する任務と権限の関係をどう調整するか。とくに人事の扱いをどうするかが大きな問題である。つぎに所外の研究者の意向をまとめるべき運営協議員の選出方法をどうするか。

(2) 研究分野間の独立性と相互関連性をどう調整するか。  
 専門委員会と分野(研究系など)との関係は 1:1 に対応させるのか、あるいは横につながって専門化を避けるべきか。後者の場合研究分野内の調整をどうするのか。また、総合計画、研究交流各専門委員会は横につながる委員会としてその任務と役割をどう規定するか。各研究系、観測施設の運営と共同利用との関係(プログラム編成、機器共同開発体制など)。上記すべての専門委員会の委員の選出方法。

国立研運営における人事の扱い。  
 まず、教官人事について考えておくべき問題点をあげてみる。  
 (ア) 人事の基本方針(長期的)と個別的人事の扱い方  
 (イ) 個別的人事の発生から決定までのプロセス、それに必要な期間の見積もり。  
 (ウ) 当該研究系(施設)の関与の仕方  
 (エ) 所内、所外委員の関与の仕方  
 (オ) ポストによる手続の異同

これらの問題点をどう考えるかによっていくつかのプロセスが可能である。個別人事について例えば：  
 A. 運営協議員に「人事委員会」を置き、そこで人事を行なう。  
 B. 運営協議員はポストの配分までを決定し、具体的な人選は関係する研究系、施設などで行なう。運営協議員はそれに承認を与える。  
 C. 運営協議員はポストの配分を決定する。関係分野の専門委員会で選考を行ない任用を申し出る。それを受けて運営協議員は「調査委員会」を置いて調査しその報告にもとづいて決定する。

京大理では運営協議員を学部教授会、分野を各教室に読み替えるとCの例にあたる。異なる点は教授会が毎月開催できるのに対し、国立研の運営協議員は毎月の開催は困難と見込まれるところである。国立研では所外の委員が人事に全面的に参加すると選考期間がどうしても長くなってしまふのである。

以上のような諸問題についても光天連で十分な議論の進むことを期待する。

#### 4. 懇談

- 小暮：所外の委員をどんなコミュニティで選ぶのか、外からの声が入る様にしなければいけない。各種の委員会のイメージをはっきりさせる必要がある。
- 高瀬：運営協議会は教授会に当たるもので今までは所内の人間だけで自治をしてきた。これからは所外の声が入る。これからは自治の面はどこがきめるのか。
- 小平：委員会は所内、所外から選ぶことと政令で決っている。所内の自治は所内教授会、幹事会が行うが協議委員会が上にくるので良く考えなければいけない。
- 高瀬：大学院教育は。
- 石田：宇宙研式の客員大講座制を要求しているが、2年待てと言われた。文部省は大学院大学の折衝で忙しい。国立研は大学と同等、所長は学長と同じ、金も取り易いが改組されてこうなって良かったという立場より、我々が好ましいモデルを作っていこうという態度が必要である。
- 小暮：来年のシンポではこうあれば良いということが言えれば良い。どこかで意見を詰める必要がある。WGでまずやってはどうか。
- 石田：光天連の人とは限らず適当な見地から人を選んで運営委員会に送ったらよい。下から積み上げる方向にしたほうがいい。
- 小暮：来年だから上と下からやらないと間に合わない。制度の面も。
- 安藤：大まかにはもうやった。具体的には運営委員会のほうに移ったつもりでいる。
- 小暮：議論のたき台がほしい。
- 関：アンケートの締切は9/10と早い。その結果が総意として出るのは。
- 小暮：整理がつくのは10月、秋の学会でアウトラインは示せるだろう。懇談会で話をしたい。
- 小平：調査室でまとめるが、数で決まる訳でもないにせよ、何等かのフィードバックはある。
- 岡村：議論のベースが必要というのは委員の選出方法又は委員会の役割が必要なのか。
- 小暮：一番大事なものは人事、どの程度まで外部の人がいる運営委員会が責任を持てるのかというのが問題。
- 関：分子研では人事選考会は 外5 + 内5
- 小暮：2カ月に一度やれば充分責任を持てると思うがそれ以下では？
- 小平：宇宙研の例では長期的に部門の統廃、設立等決める場合、下から持ち上げてきて運営協議会に伝えてまずは1日で決まる。個別の案件については所内委員→所長→運営協議会→(委託)所内の人事委員候補(4人)→運営協議会→内2、外2を加え8人の人事委員(1~2回)→推薦→運協。2~3カ月で決定。分野、部内については運協で議論になっても次回送り、公募の条件については良く話される。
- 小暮：野辺山でも人事はやらない(共同利用委員会では)としても一般論はしている。所内の意見は充分伝わらないといけな。適当なモデルが必要。
- 関：人えらびも最初だからこそ大切、所長も力を持つのでつながりも大切。後から委員を変えるのは大変。
- 小平：何人が内、外 というのは後でいい。フローチャートみたいなものが欲しい。運協に外郭団体みんなが人を送り込んで衝突するとつけこまれる。分野の利益代表の集まりでは駄目だ。

(以上)

#### V. 東京天文台改組準備調査委員会(第3回会合メモ)

第3回会合は昭和62年6月13日(土)に東京三鷹で開催された。要旨は次のとおりである。

古在委員長より文部省で開かれた「天文学研究を推進するための調査研究協力者会議」(第2回、6月6日)について、また、東京大学内での審議の状況(評議会、部局長会議など)について報告があった。ついで、平山調査室長から第6回(5月23日)から第9回(6月6日)までの調査室の議事抄録を中心に、定員配置、共同利用、技術部、工場、キャンパス、専門委員会等について検討の状況が報告された。

##### 1. 「構想素案」全般について

始めに主として台外委員から問題点の指摘があった。

\*\*素案には現在の東京天文台の状況が強く反映しているが、それで良いのか。

\*\*日本の天文学のなかでの国立研の役割と全国の大学・研究機関の整備との関連をもっと明確にすべきではないか。

\*\*国立研の役割は天文学センターとして天文学のすべてをカバーするものではない。大型装置の建設・維持、共同利用・共同研究の推進・サービス等重点を明確にすべきではないか。

\*\*東京天文台のヒステレシスがそのまま固定するのは良くない。現状では国立研は新設ではなく改組転換なのだから現状ではその点を認め、一定年限後に見直しを行なうのはどうか。

\*\*昨年光天連から天文台長宛てに要望書を出したとき、その第1項目に東京天文台の改組は単なる改組でなく新しい研究所の創設を目指して欲しいと述べたのは前項の意味を含んでいる。その観点から、系、部門、定員の配置については発足時には時限的なものとし、適当な時期に総合計画専門委員会等で見直すのが良いのではないか。

また、台内委員から国立研には位置天文のように必ずしも共同利用的でないものもあり、共同利用と言う観点から定員や予算などに制約を受けたりするのは問題である、と言う発言があり、それについては天文学全体の視点からそのような分野も尊重されるべきであるという議論があった。

##### 2. 共同利用について

海部委員から「共同利用機関における特別予算」として、(1)臨時事業費、(2)共同利用研究施設運営費、が検討されている旨報告があり、高エネ研、分子研等との比較して議論があった。また、高エネ研等では学術振興会を窓口にする「海外特別事業」と言う経費も有効に使われているという報告もあった。

共同利用のワーキンググループから共同利用に関するアンケート調査を実施予定でその準備も進んでいる旨報告があった。

##### 3. 専門委員会について

前回は古在委員長、小暮委員からそれぞれ専門委員会のイメージが紹介されたが、今回は小平委員から同じくイメージについて私見と意見集約の紹介があった。意見が大きく分かれているのは分野別専門委員会の取り扱い事項のなかの人事関係である。これについては前と同様の議論があり結論はでなかった。

##### 4. 技術部について

技術系職員の現況について東京天文台の現況が紹介され、新しい国立研における「技術部」のあり方について議論された。基本的な視点は技官の処遇と研究所における技術業務の円滑な遂行である。処遇に就いては技官の教職への移行が従来どう行なわれるべきであるという方向で議論が進んだ。「技術部」についての検討は更に継続されることになった。

次回は7月4日に開催される。

(文責 小暮)

(書小 貴文)

## VI. 東京天文台改組準備調査委員会 (第4回会合メモ)

第4回委員会は1987年7月4日に東京で開かれた。その要旨を紹介する。

### 1. 報告

◆改組準備調査室平山室長より第10回-第12回調査室議事抄録を中心に調査進捗状況の報告があった。

◆同じく平山室長から東京天文台から東大に提出された概算要求の内容についての説明があり、古在台長からも補足説明があった。とくに系、部門等の組織についての修正として

(宇宙電波、地球回転) 研究施設 ⇨ 研究系

それに伴う観測所、センターの設置など。

◆6月5日に文部省で開かれた協力者会議で問題になった中間報告の改定について、その後の検討状況が古在委員長から説明された。全国共同利用機関の性格をもっと前面に出すこと、大型観測施設の計画推進を明確にうたうという方向で改定が進んでいるとのことであった。

### 2. 大型光学赤外線望遠鏡計画の推進について

改組に関連して大型計画の推進が重要な問題となって来たので、望遠鏡計画が委員会で始めて本格的に議論された。小平委員から検討の経過及び現状の報告があり、そのあと、計画の推進に対し東京天文台以外からの参加状況、共同利用の実情等について議論があった。ついで委員のなかから天文台改組と平行して望遠鏡計画を推進すべきであるという意見と要望が次のように出された。

◆技術的には未だ難しい点もあるが次のステップへの前進のためタイミングが重要である。

◆改組とJNL T計画の概算要求との関係はどうか。(JNL Tは改組とは別に調査費の要求が出ている; 改組の主な理由の一つとしてJNL T計画の推進があげられている。)

◆調査費の内容はどうか。(技術的調査は科研費等の経費でかなり進んでいる。したがって調査費は環境アセスメントなどハワイとの関係調整等が主となる)

◆天文台改組とJNL T計画推進とはできる限りカップルさせるのがよい。

◆JNL T調査費に就いては協力者会議でも積極的に推進してもらえよう委員長からも要望して欲しい。

### 3. 技術部について

国立研に技術部をおく方向で検討が進んでおり、その組織案(第I-第IV技術室、実験開発工場)が示され、いわゆる部課制との比較で種々議論があった。

◆技術室制も外見上部課制と変わらないように見える。詳しい説明が必要でないか。

◆実験開発工場は将来の「種」と言うことだが、将来は技術部所属でなく教育職も加えた組織にするのが必要でないか。

### 4. 共同利用・共同研究について

臨時事業費は共同研究と言うより長期的な開発的経費として数本走らせる方針で検討が進んでいること、また、共同利用体制等について関連研究者に対するアンケート調査の準備が進んでいること、の報告があり、アンケートの内容について議論があり了承された。

次回は7月25日に開催予定

(文責 小暮)

## VII. 東京天文台改組準備調査委員会 (第6回会合メモ)

第6回委員会は1987年9月19日東京で開かれた。要旨を紹介する。

報告 古在台長から概算要求についてその後の状況が報告された。JNL T関係の調査費は何らかの形で含まれるという見通し。

報告と議事 平山調査室長から第16-18回調査室会議議事抄録の報告にもとずいて以下のような問題について議論を行なった。

1. 停年制: 60才とする方向で議論が進んでいる。

2. 設置目的: 新しい国立天文台(仮称)の設置目的に「必要な事業」として天象観測、時計の検定等古くからある具体的事項をどう織り込むか。

3. 人事の進め方: 国立天文台(仮称)への移行は昭和63年4月を目標に準備が進んでいる。

12月に内示があると人事を始め急速に移行準備を整える必要がある。人事については移行に伴うものと、移行後の定常的な扱い方の2つがある。両者について案が示され問題点が検討された。

「人事の進め方についてのいくつかの試案」を要約すると次のようになっている。

1) 運営協議員会 --- 一般論 (2ヶ月に1回開く)

2) 空きポストの分野についての原案作成手順(4案あり) --- 研究所が主体

3) 運営協議員会 --- 分野の決定、「人事選考委員会」の発足

4) 「人事選考委員会」における選考(2案あり) --- 候補者を推薦

5) 運営協議員会 --- 候補者の決定

### 問題点

0: 技術系ポストの扱い方

0: 教授から助手まで同じ手つずきでよいか。

0: 「人事選考委員会」の委員の構成 --- 所内外の比率、分野の尊重、専門委員会との関係

0: 分野が決定すれば選考は当該研究系に委せるという案もありうる。

4. 運営協議員の選任方法: 可能な方法を列記すると

選挙する 0 天文学会に委嘱

0 新たに研究者を登録する

推薦による 0 研連に委嘱 --- 関連研連をどこまでとるか

(天文、測地、地物、物理、---)

0 天文学会

0 研究者組織(光天連、宇電懇、---)

これらのうち第1回は研連推薦という方向が検討された。

5. 次回は11月21日(土)

(文責 小暮)

Ⅷ. 第4回岡山ユーザーズ・ミーティング報告

第4回岡山ユーザーズ・ミーティング(東京天文台岡山天体物理観測所・光天連ユーザーズ・コミッティ共催)が、1987年8月26日、27日の両日に渡って観測所の地元である岡山県浅口郡鴨方町町民会館で開かれました。技術シンポジウム・シュミットシンポジウムと連続して開催され、べ83名が出席しました。今回のユーザーズ・ミーティングでは、東京天文台が国立共同利用研に改組拡充される時期であるため、観測所の運用についての議論と、今年度予定されている188cm望遠鏡駆動制御系の改修についての議論が重点的におこなわれました。清水実副所長からステータス・レポートとオブザーバズ・レポートのまとめがあり、その中で来年3月一杯は望遠鏡改修のため188cm鏡の利用を行わない旨の提案がありました。188cm望遠鏡改修の具体的内容について、渡辺悦二氏(岡山観測所)から報告がありました。主として、(1)老朽化した望遠鏡駆動系の交換、(2)望遠鏡位置表示の高精度化、(3)望遠鏡制御系の改修—計算機ネットワークとシーケンサーの利用が提起されました。舞原俊憲氏(京大)からは188cm望遠鏡の赤外仕様についての提案があり、これらを用いて活発な議論がなされました。牧田貢氏(東京天文台)は、太陽マグネトグラフの現況とその一年の成果について報告しました。西村史朗氏(東京天文台)は、岡山での機器開発についての今までのまとめと問題点を整理されました。総合討論(司会前原英夫、定金晃三、平田龍幸各氏)では、(1)岡山観測プログラムの編成、(2)機器開発、(3)共同利用について今まで以上の活発な議論がなされました。プログラム相談会メンバーの推薦がなされ、機器開発については、宇宙研での装置開発の現状を例に、国立研下での新装置の提案、採択、制作、評価についての議論がなされました。共同利用について、岡村定矩氏(木曾観測所)のまとめと問題点の指摘がありました。望遠鏡を有効に利用し後継者育成のために観測プログラムでの若手の観測プロポーザルの優先、レフリー制を含めた観測プログラム編成方法の再検討の必要性が強く指摘されました。

岡山観測所の望遠鏡・装置類を用いた(用いる)個々の研究・観測については、今回は、ポスター・セッションで行い5論文が提出されました。午後の30分間のポスターセッションの議論の時間には、各ポスターの前で発表者を囲んでの議論が行われました。

今回は、国立共同研への移行時期であり、共同利用についての各研究者の議論を深め、岡山観測所の共同利用のあり方を探るために、議論の時間を長くとりました。観測所が正式に共同利用になるにあたって、ユーザーズ・ミーティングは利用者の総意を反映する場としてますますその重要性をましてくるものと思われま(山下所長挨拶)。観測所の運用、機器開発についての議論がユーザーズ・ミーティングで活発になされ各種委員会に反映されることが期待されます。

27日には、CCDに関するWork Shopが開かれました。既に、岡山観測所188cm望遠鏡の観測230夜中70夜(30%)がCCDを用いた観測であり、蓄積されつつある観測・整約ノウハウの交換と、今後のCCD開発計画について議論をしました。

26日の夕刻には、三シンポジウム共同の懇親会が鴨方町商工会館で開かれました。岡山ユーザーズ・ミーティングとCCDワークショップの集録は別々に近日中に発行する予定です。

(佐々木敏由紀)

次回は7月25日に開催予定

(文責:小暮)

Ⅸ. 観測機器ワークショップ報告

JNL T観測機器ワークショップ(WS)が9月25-26日の2日間東大図書館会議室と理学部天文学教室(26日午後のみ)で行われた。

今回のWSの目的は、

- 1) JNL T望遠鏡の初期立ちあげ時における具体的な個々の観測装置について、その主たる天文学的目標と達成すべき性能パラメータ(限界等級、分解能等)、及び概念設計と具体的デザイン、そして出来ればその設計・製作体制(担当グループの特定等)までを、それぞれ提案しあって議論を行うこと、
- 2) 初期装置に限定しないで、JNL Tの特徴を生かした独創的機器、又は天文学フロンティアの開拓に必要な基礎技術の開発に関する問題提起についての議論する、といことであった。
- 3) 更に観測装置とのマッチングの方法との関連で、望遠鏡本体に関する部分について、赤外線副鏡のF比、ガイド装置、ナスミス台の構造、等の議論も行なった。

最初のカテゴリー1)に属するものとしては、表1のような具体的提案の報告について議論された。

表1. 初期装置の提案

それぞれの装置についての検討の程度はかなり差があるものの、現時点では表1の各々は初期装置の候補と考え、今後更に検討を深め、比較的早い時期に設計・開発の実行計画案(具体的デザイン、開発・製作の体制)を呈示出来る段階に行く努力を行なうことになった。

1. 広視野カメラ(0.5, 写真OR CCD)
2. スペックル干渉計
3. 赤外線カメラ
4. 多天体分光器
- 4'. 分光器カメラ
5. 微光天体分光測光偏光器
6. 高分散分光器(エッセル)
7. 赤外線グレーティング分光器
8. 赤外線フュブリペロ分光器

一方、問題提起的な項目では、K e c k望遠鏡とのサブミリ波・光の干渉計、赤外線2次元検出器開発、サブミリ波検出器開発等の報告が行われた。

JNL T本体に関することとしては、赤外線領域での高解像力の特徴を生かすために、F/12.5リッチクレチエンの赤外線副鏡が必要なことが認識された。又観測機器が共通で必要とするガイド関係の装置(イメージローテータ、オートガイダー等)の議論では、その部分の具体的設計を岡山観測所が中心となって担当することになった。

最後に来年度国際望遠鏡技術ワークショップを日本で開催してはという、小暮運営委員長の提案について若干議論し、観測機器も含めて行なう方向で検討することになった。

(文責:舞原)



X. 会員の移動

新入会：小林英輔	〒558	大阪市住吉区菟田4-13-23	06-692-1882
砂田和良	〒384-13	大阪府科学教育センター 長野県南佐久郡南牧村野辺山 東京天文台野辺山観測所	0867-98-2831
村田泰宏	〃	〃	〃
篠原正雄	〒154	東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒沢大学自然科学教室	〃
三上孝雄	〒564	大阪市吹田市岸辺南2-36-1 大阪学院大学	〃
田辺健茲	〒700	岡山市理大町1-1 岡山理科大学教養部	0862-52-3161 (内3406)
移動 西川 淳	〒181	東京都三鷹市大沢2-21-1 東京天文台分光部	0422-32-5111
渡部潤一	〃	〃	〃
佐藤修二	〃	東京天文台測光部	〃
高見英樹	〃	東京天文台銀河系部	〃
渡辺正明	〒158	東京天文台銀河系部 東京都	〃
会津 晃	〒215	川崎区	〃
山下卓也	〒384-13	長野県南佐久郡南牧村野辺山 東京天文台野辺山宇宙電波観測所	0867-98-2831

おことわり

会報 No. 45 会員の移動の項

林佐絵子 United Kingdom Telescopes 665 Komohara Street

林左絵子 〃 〃 〃 Komohana 〃

X I.\* ハワイ便り

光天連における共同利用の議論に関係して、マウナケアの15mサブミリ望遠鏡が、その建設にさいして諸機関を共同利用している状況を紹介したいと思います。建設の責任はCambridge大学の電波天文学者が担っていますが、運用はエディンバラ天文台。アンテナ本体とドームの設計・建設はおもにオランダのgeniusという会社とイギリスのRatherford Appleton Laboratoryが担当。RALはイギリスが最近CERNに加盟したあおりで、大型加速器の建設から疎外され意気消沈していたところで、この新しい仕事に積極的に参加しています。コンティニウム受信機はイギリスやスコットランドのエディンバラ天文台で作られましたが、担当者はクイーン・マリー大学出身。(この大学、大きくもなくオクスフォード・ケンブリッジに比べて有名でもないのに、天文学のアクティビティは極めて高い。)ヘテロダイン受信器の一つはケンブリッジ製。それにつなぐ分光計はケント大学製。これらのプロトタイプは、ここ数年UKIRTで観測に使用されていました。より高周波のヘテロダイン受信器とそれにつなぐAOS分光計はオランダ製。さらにもう一つのヘテロダイン受信器がケンブリッジ・クイーンマリー共同で製作中、今年度中にハワイにお目見えの予定。ここに、自国での電波天文をあきらめねばならなくなったカナダが参加。特に技術者と新しい分光計が歓迎されています。またカナダの資金でオペレーターを増やし、望遠鏡の運用を1日12時間(オペレータ=1人/日)から18時間(オペレータ=2人/日)にのばすことができそうです。ちなみにイギリス(もといスコットランド?)本国はエディンバラにおける電波部門の責任者は、ジョスリン・ベル・バーネル、その昔ケンブリッジでパルサー発見の端緒を担った人です。

林 左絵子 Saeko S. Hayashi  
United Kingdom Telescopes  
665 Komohana Street  
Hiro, Hawaii 96720, USA